

教会の祈り

使徒言行録12章1～17節

2022年7月3日

松田 基子 師

キリスト教は、天地万物の創造主である、唯一の神様を信じる、ユダヤ教を母胎としています。

ユダヤ教を遡りますと、神様はユダヤ人の祖、アブラハムを選ばれ、創世記12章2節で、

「わたしはあなたを大いなる国民にし、
あなたを祝福し、あなたの名を高める。

祝福の源となるように」

と、約束されました。この神様の約束は、神様の一方的な愛と、真実によって、その子孫たちが神様に背いた歴史を刻んだにも拘わらず、守り通されました。

アブラハムの子孫は、エジプトの奴隷となりましたが、12部族からなるイスラエルの民となってアブラハムに約束された、カナン之地に戻って来て土地が与えられました。しかし彼らは神様の大きな恵と使命を受けながら、神様に従う事をしませんでした。結果は内部分裂で、北イスラエル10部族と、南ユダ2部族に分かれてしまいました。北イスラエルは紀元前721年に、アッシリアに滅ぼされてしまいました。南ユダも神様に背いた為に、紀元前586年に新バビロニア王国に滅ぼされてしまいました。南北共に、列強に滅ぼされましたが、神様の約束は南ユダに受け継がれました。

神様はダビデに与えられた、

「あなたの王座は永久に堅くすえられる」

との約束を守られ、民族が滅んでしまうことはありませんでした。その南ユダには、神様の名が置かれたエルサレム神殿がありました。そこでは背信の王が、神殿を異教化した時もあったのですが、信仰に忠実な預言者達が、真実の信仰を訴え、それに従った、忠実な人々がいました。南ユダには、必ずその様な一握りの、神様に忠実な信仰者達がいたのです。

彼らはバビロン捕囚に遭ったとき、

『捕囚は神様への悔い改めのためであり、
また必ずエルサレムに帰還する時が来て、
そこで神様を礼拝することが出来る』

との信仰を持ち続けました。その信仰を持って、信仰の土台となる聖書(旧約聖書)の編纂を成し遂げました。紀元前539年、ペルシヤは新バビロニアを滅ぼし、ユダヤ人に解放令を出し、エルサレム帰還を許しました。

信仰に生きるユダヤ人たちは、エルサレム神殿再建と、主なる神様への全き服従を目的に帰還しました。彼らはユダ王国の民と言う意味から、ユダヤ人と呼ばれ、その信仰がユダヤ教と呼ばれました。創造主である神様が居られ、世界はその神様が支配し、導いておられるのだから、聖なる神様の掟、律法に従って生きて行かなければならないと言う高潔な生き方は、人間中心の世俗神には、見られないものでした。

彼らは主なる神様を誇りとし、

『自分達が、その神様の選びの民である』

と言う事を誇りました。ローマの支配下にあったイエス様の時代の人々は、ダビデに約束された、ダビデの様なメシア・救い主が現れると信じていました。しかし、神様の真の祝福の約束は、そんな所に在ったものではありませんでした。人間は生まれながらに、自己中心で、神様に背く性質を持っていて、罪を犯す罪人です。その罪の重さは、自分の命を差し出しても償えるものではありません。結果は永遠の滅びに向かうのです。神様はユダヤ教の永い歴史の中で、その事を教えて来られましたが、神様はそれに依って、断罪し、拒絶されたものではありませんでした。その人間の罪の身代わりとなって、神様に対して、人間の罪を償い、贖う存在が現れる事を、預言者を通して示してこられました。実はそのお方こそ、真のメシア救い主であり、人間には成し得ない努めでした。その為に人の子として、この世に生まれて下さったのがイエス様です。

イエス様は、神の子の位を捨てて、人の世に生まれ、人の生きる悩み、苦しみを負い、遂には人間の罪をその身に、一身に負って、十字架に

架かり、人類の罪の贖いを成し遂げて下さいました。神様はイエス様が人間の存在を救う真の救い主、メシアであること、十字架の贖いによって、人間に罪の赦しを与えられ、救いの道が開かれたことの証明に、イエス様を十字架の死から三日目に、復活させられました。この事について、使徒ペトロは、ペンテコステの日に、使徒言行録2章36節で、

「イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」

と言っています。しかし、その言葉は、ユダヤ教指導者達にとっては、人心を惑わす、受け入れ難い、聞き捨てならない言葉でした。

彼らが考えるメシアは、ダビデの系譜から、ダビデの様な強く勇ましい、自分達をローマの圧制から解放してくれる存在だと思い込んでいました。そのため、イエス様がどんなに奇跡を行われても

『十字架から降りて来られないメシア
なんて、彼らには考えられない事』

でした。彼らは神様の御心ではなく、人間の考えに固執したのです。人間の考えから出られない、自分達の都合しか、考えられない、ユダヤ教指導者達と、それに追従する民衆は、

『イエス様こそ、救い主、メシアだ』

と宣言する弟子達に、非常な怒りを覚え、攻撃迫害を加えました。しかし、その事は反って、この道を信じる者を遠くに行かせ、異邦人にも福音を伝える機会となりました。迫害を逃れた信徒たちは、地中海第三の都市、アンティオキアまで逃れて行きましたが、その地で多くの異邦人が、イエス様を信じました。そこで、この都市の人々は、彼らはユダヤ人であり、ユダヤ教の創造主なる神様を信じているけれども、十字架にかけられ、死んで復活したイエスを、救い主、ヘブライ語でメシア、ギリシャ語でキリストと呼んでいるグループであるということから、ユダヤ教徒とは区別して、キリスト者と呼ぶ様になりました。

一方エルサレムでは、神殿を中心とした宗教

体制は強固でした。体制側はキリスト者を異端として迫害していました。紀元41年、ヘロデ大王の孫のヘロデ・アグリッパ1世は、ローマから既に王の称号を得ていました。ヘロデ大王の時の広さにせまる、広大な土地が与えられました。それらの土地は、彼が治める前は、ヘロデの息子達が分封領主として治めていました。使徒言行録12章1節に登場するヘロデは、このヘロデ・アグリッパ1世のことです。彼は紀元44年に、突然亡くなるのですが、彼にとって、祖父のヘロデ大王に匹敵する地位と、領地を得たことは誇りでありました。しかし、1つの問題がありました。それはエルサレムの神殿指導者達を初め、ユダヤ民衆に、自分が嫌われ、歓迎されない存在であるということでした。

ヘロデ大王も苦慮したところですが、彼の家系はエドム人の流れを汲んでいました。それに彼は、ローマ風の生き方をしていましたので、血筋を重んじ、ローマ風の生き方を、異教の習慣として嫌うユダヤ人にとっては歓迎されず、嫌われる存在でした。そこで、アグリッパ1世は、宗教指導者達と民衆に、気に入られる為には、どうしたら良いかを考えたのです。

彼らが嫌っている存在は何か、それを考えた時に、キリスト者達が浮上しました。

アグリッパ1世は、

『ユダヤ人指導者達が憎んでいる、キリスト者達を迫害したならば、きっと彼らは自分を好ましく思うに違い無いと考えたのです』

使徒言行録12章1節を見ますと。

「そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した」

と有ります。このヤコブは、ガリラヤ湖で、兄弟ヨハネと共に、漁師をしている時に、イエス様から直接、

『わたしに着いて来なさい。人間をとる漁師にしようと言われ、直ぐに従った人物です』

この兄弟はイエス様から雷の子と呼ばれました。

その意味は、

『神の声の伝達者』

を意味していました。力強い説教者だったのでしょう。それだけに目立ち、捕らえられたのでしょう。アグリッパ1世は、ヤコブを殺させました。その事は、宗教指導者達を初め、民衆を喜ばせました。3節には、

「それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、
更にペトロをも捕らえようとした」

とあります。権力者と言うのは、民が1人とか、少数である場合は、自分の思い通りに生殺与奪の権を振り回します。しかし、権力者が一番恐れることは、群衆が一丸となって、自分に向かって来ることです。あの総督ピラトも、イエス様の無実を認めながらも、群衆の声に負けてイエス様を十字架に付けてしまいました。アグリッパ1世は、更に民衆の関心を買おうと、今度はキリスト者の大物、イエス様の一番弟子、ペトロを捕らえさせました。

ペトロは捕らえられると、24時間監視態勢の下に置かれました。4人一組の兵卒が4組、3時間交代で監視に当たりました。1組4人の内、2人は、ペトロの両側から鎖で彼を繋ぎ、他の2人は、牢の前で見張りに就きました。ヤコブが殺され、ペトロが捕らえられ、教会全体に、アグリッパ1世の脅威が迫って来ました。教会は逃げたのでしょうか。

12章5節を見ますと、

「こうしてペトロは、牢に入れられていた。
教会では彼のために、熱心な祈りが
神に献げられていた」

とあります。教会はこの世から見たなら、無力です。権力も地位もお金もありません。しかし、教会には、その様なこの世の力に勝る力があります。

『それが祈りです』

神様に信頼する祈り。神様の最善を信じる祈り。神様の助けを求める祈りです。教会は牢に捕らえられたペトロを、人間的な力で、救出する事は出来ませんでした。が、神様に祈り、助けを求めました。

6節を見ますと、

「ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の
前夜、ペトロは二本の鎖に繋がれ、2人の兵

士の間で眠っていた。番兵達は戸口で牢
を見張っていた」

とあります。ペトロは自分も、ヤコブ同様殺害されると覚悟していたでしょう。でも、何と鎖に繋がれながら眠っていたと言うのですから、如何にイエス様の守りを信頼していたかが分かります。そんなペトロの許に、主の天使が現れ、光が照りました。天使はペトロのわき腹をつついて起こすと、

「帯を締め、履物を履きなさい」

と命じました。

ペトロは天使に起こされても、夢心地で、何が起こっているのか分かりません。

「着いて来なさい」

の命令に、唯着いて行きますと、厳重な守りの中にある、第一、第二の衛兵所を過ぎて遂に、町に通じる最後の門まで来ると、それは頑丈な鉄の門ですが、ひとりで開いて外に出る事が出来ました。すると、先導の天使は見えなくなりました。

ペトロはやっとそこで気がつきました。

11節に、

「ペトロはわれに返って言った。今、初めて
本当のことが分かった。主が天使を遣わして、
ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくだ
さったのだ」

と言っています。ペトロは神様の守りの確かさに感謝し、ヨハネ・マルコの母マリアの家に急ぎました。

12節に、

「そこには、大勢の人が
集まって祈っていた」

とあります。キリスト者の素晴らしさは、他者のために共に祈る事で一致する事が出来る事です。これが何よりの奉仕です。彼らの祈りは聞かれたのです。ペトロはマリアの家に着くと、門の戸を叩きました。女中のロデがやって来ました。ペトロが外から声をかけると、ロデにはそれが懐かしいペトロの声だと分かりました。彼女はもう喜びのあまり、戸を開けもしないで、

家に駆け込んで、

「ペトロが門の外に立っている」
と喜びを告げたのです。するとどうでしょう、
15節に、

「人々は、

『あなたは気が変になって居るのだ』
と相手にしてくれません。ロデが本当だと
言い張ると今度は、

「それはペトロを守る天使だろう」
と言い出す始末です。

人間は、自分の考え、常識から出られない
ものです。神様に祈っているながら、常識が働い
て、神様の働きを制限してしまうのです。一方
ペトロは、戸を叩き続けています。そこでやっと
皆は戸口に向かい、戸を開けると、そこには、正
真正銘のペトロが立っているではありませんか。
17節を見ますと、

「ペトロは手で制して、彼らを静かにさせ、
主が牢から連れ出してくださった次第を、
説明し、この事をヤコブと兄弟達に伝え
なさいと言った。そして、そこを出て、
他の所へ行った」

とあります。

ヤコブは、イエス様の兄弟のヤコブで、エルサ
レム教会の柱、代表となった人です。ヤコブや
指導的立場の人が、そこには居なかったという
ことは、マルコの母の家で祈っていた人たちとい
うのは、自主的に、共に祈らずにはいられなくて
集まっていた人たちだと思われまます。

フィリピの信徒への手紙4章6節には、
「どんなことでも、思い煩うのは止めなさい。
何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささ
げ、求めているものを神に打ち明けなさい。
そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和
が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエス
によって守るでしょう」

とあります。どんなことを祈っても神様はその祈
りを受け止めてくださいます。

しかし、そこには、神様に対する絶対的な信頼
が必要です。祈りはこちらの願いを神様に押
しつける事ではありません。行き着く所は神様

の最善に委ねる事です。また、祈りは神様の
御心を尋ね求め、神様の御心に自分が変えら
れて行くことです。救い主イエス・キリストを十
字架に掛けたユダヤ教の指導者達には、その
事はありませんでした。

教会が立てられている目的は、何でしょうか。
イエス・キリストの御救いを宣べ伝え、神様の栄
光を現すことです。その為に一番必要な事は、
祈りによる一致です。皆、考え、立場は違っ
ていても、人に向かうのではなく、皆一様に、

『神様に向かう姿勢で一致すること』
です。神様は必ず最善に導いて下さるとの、
確信と、希望をもって祈り続ける事です。私達
の教会も、これからどんな問題に遭遇するか分
かりませんが、神様を世界の創造主であり、支
配者、イエス・キリストを真の救い主、聖霊の確か
な導きを信じ、祈りに依って一致し、祈り合っ
て行く教会とならせていただきます。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は私達に、イエス・キリストによる御救い
を与えて下さったばかりか、全ての事を祈る事を
許し、最善に導いて下さる事を感謝いたします。

また、私達が、キリストの福音宣教の使命に、
生きる様に、教会を与え、共に祈り合う共同体と
して下さったことを感謝します。

どうか私達はこれからも、神様に向かう祈りに
依って一致し、主の御心に従って行く者となら
せて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。